

四旬節第2主日

第一朗読 創世記 22・1-2、9a、10-13、15-18

第二朗読 ローマ 8・31b-34

福音朗読 マルコ 9・2-10

2024.2.25 高円寺教会 9:30 ミサ

広島教区司祭 原田豊己とよき神父

(カトリック中央協議会次長)

ご存知のように、第二バチカン公会議のときに典礼刷新運動が起りました。古い信者さんにご存知だと思いますが、昔はマタイ福音書だけがずっと読まれていました。それを3年周期で三つの共観福音書マタイ、マルコ、ルカを読んで、季節にはヨハネを読む、そうして福音書全体を、単純に言えば4年間毎週日曜日にミサに与っていれば新約聖書の福音書は全部読むということになります。

それに合わせて、その日——今日は四旬節の第二主日ですけども、それに合わせて福音書が選ばれました。今年はマルコが読まれる年ですので、マルコの中で変容の記事が読まれました。この変容の記事に合わせて、相応しい旧約聖書の箇所が選ばれています。ですから、福音書と第一朗読の旧約聖書は密接な関係にあります。ある意味、謎解きのような感じがします。

ちょっと謎解きをしてみましましょうか。一つは、同じ言葉が使われているかどうか、という謎解きです。まず、福音書が中心ですから、「高い山」(マルコ 9・2) が出てきます。そうすると、第一朗読にも「モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい」(創世記 22・2)、山の名前は書いてありませんが「山に登る」があります。アブラハムのこの話の終わりは、山から降りる。福音書も同じで、9節で「一同が山から降りると」と一緒です。

また、もう一つ一緒の言葉があります。それは、福音書で7節、「これはわたしの愛する子。これに聞け」の「愛する子」です。第一朗読も同じ様に、例えば、「あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげる」(創世記 22・12) とか、それからそのあと、「自分の独り子である息子すら惜しまなかった」(創世記 22・16)。ご存知のように、アブラハムには子どもがなかなかできませんでした。そのために、女奴隷ハガルからイシュマエルという長男が生まれます。しかし、そのあとにサラからこのイサクが生まれて、ハガルとイシュマエルは追放されて行きます。長男がイシュマエル、次男がイサク、ということですが、今、中東でいわゆるパレスチナ問題と言われていますがパレスチナ人という人種はいませんので、いわゆるユダヤ人とアラブ、このアラブの先祖がイシュマエルです。ですから、兄弟の争いと言うこともできます。——この問題は黙想(ミサ後の黙想会)のときにまた取り

上げます。人間が犯す最初の罪、それは兄弟殺しです。カインとアベルの兄弟殺しの話ですが、それは神が赦しを与えていくきっかけになります（黙想会では兄弟の赦しの話を中心にします）。

では、わたしたちはこの主題、同じテーマから、何を励ましとして、次の主日に至るまで生活をしていくかということを考えなければなりません。

そこで、アブラハムには神がイサクを与えた。その与えた神は、またご自分にいけにえとしてささげろと命じます。与えたものはすべて神のもの。福音書も同じで、イエスが死んで復活するということがこの変容の今日の福音書で暗示されていますけども、死んでいたものが生き返る、いわゆる復活。亡くなってそれで終わりではない。与えられて、失って、それで終わりではない。すべては神が与え、神がご自分のもとにまた戻される。わたしたちの人生も、わたしたちの地位も名誉もすべてそこにつながっていると思います。世界を見ても、自分の名誉、権力、それだけを考えて争いを続けている現実があります。また、自分のことだけ考えて、人に隠れてお金を着服する者もいます。しかし、神が与え、神がまた戻せと言うのであれば、わたしたちはそれに素直に従っていく。これがいわゆるアブラハムの信仰であり、変容の記事でわたしたちが受け取っていく神からのメッセージだろうと思います。

「神は与え、また奪う」（ヨブ 1・21 参照）。灰の水曜日に灰を受けたときに祈られたその言葉を、今日もまた思い出していきたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>